
星のカービィ 運命の車輪

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ 運命の車輪

【Nコード】

N9782Y

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

ププランド史上最大の危機！？このままではププランドどころかポップスターも滅んでしまう！その未来の鍵になるのが、宇宙を旅する盗賊団で…！？運命の車輪に導かれ、カービィの戦いが今幕を開ける！

この話は小説カキコというサイトで2011年の3月から5月にかけて連載したカービィ小説です。すでに完結済みです。

序章 運命の車輪（前書き）

実はこの小説が人生初の二次小説だったりします（*^|^*）
構成は星のカービィ アニメ+星のカービィ 参上！ドロツチエ団
！です。

序章 運命の車輪

広大の宇宙のどこかに、ポップスターという星があります。
その星のまたどこかに、ププランドという国があります。

ププランドはとても平和な国、たまにおバカな自称大王の暴君が、
騒ぎを持ち込むだけで、大変豊かな国です。

ププランドには、とても大切な秘宝があります。

『運命の車輪』という名の秘宝です。

その秘宝は、ププランドの運命を守る強大な力を持っています。
車輪があるから、国は栄え。

車輪があるから、富は平和な暮らしをおくれるのです。

『運命の車輪』には、ププランドを愛する人々の思いで力を発動
させています。

遠い美しい泉を守る、星の杖のように……。

『運命の車輪』は、いわばププランドの心臓です。

車輪がなくては、ププランドは滅んでしまいます。

それほど大切なもの。

巨大な存在。

『運命の車輪』は、ププランドの奥深き谷に存在する生ある遺跡、
カブーによって守られています。

カブーは心臓の門番です。

車輪の存在は、カブー以外は誰も知っていないのです。

ププランドが生まれた時からある巨大な存在は、形すら見せず、
存在しているのです。

運命を変えうる力。

車輪の力は強く。

最強です。

もし悪の手に渡ってしまったら。

この世界は一体どうなってしまうのか……。

だからこそカブーはその存在を誰にも告げませんでした。

プププランド……世界を守るためにも。

だから今の今まで、プププランドは平和を保ってこれたのです。

これからも保ち続けるつもりでした……。

だからこそ、

誰もこれから起こる危機に気づいてはいませんでした……。

第1章 はじまる桃色（前書き）

カキコのサイトのほうと、改変している場所が多数あります。

第1章 はじまる桃色

ここはププブランド。

あきれかえるほど平和な国……。

「カーーーーーービイイイ
！」

少女の甲高い声が、ププ高原の広い大地にサイレンのように響き渡る。
。

「はははははーい なあに？フーム？（汗）」

カービイと呼ばれた、かわいらしい桃色の丸い球体の生物は、フームと呼んだ亜麻色の髪の少女に、冷や汗を浮かべながら返事をした。

「カービイ……あなた、私の作ったクッキー食べたでしょ」

フームは大きな瞳を最小限にまで細くし、カービイを睨み付ける。

「あははー……ボクがそんなことするわけないでしょ……
ボクは机の上にあったクッキーなんて……たたた食べてないもん
ー」

あきらかに動揺しているカービイに、フームは一つ咳払いをした。

「じゃあカービィ。質問させてもらっわ。どうしてあたしの作ったクッキーが机の上に置いてあったことを知ってるの？」

「え！え……えっとーそのー……」

「そして、あなたの口のまわりについているのは、なあに？」

フームはカービィの口のまわりにこびりついている、クッキーの力を指差した。

「う……う……う……う……ごめんなさいっ！」

観念したかのように、カービィは緑の生い茂る平原にひれ伏した。

「ごめんなさい……ボク……ボクおなががすいてて……つい・

・……本当にごめんなさい！」

小刻みに震えているカービィは、自分の真正面にいるフームに顔向けができなかった。

カービィはフームにめちゃくちゃ怒られるのかと思っていた。

しかし、その予想に反して、フームは微笑んでカービィの小さな背中を、やさしくなでた。

カービィはその行動にびっくりしたのか、思わず勢いよく顔を上げてしまった。

「え？……フーム？」

「大丈夫よカービィ。もともとあのクッキーはあなたにあげるつもりだったの」

フームは、カービィをだっこするように持ち上げた。

「でもね、もしあのクッキーが他の人にあげるクッキーだったら、私はもっとカービィのこと叱るわ」

カービィはしょんぼりとうつぶいて、「うん・・・」と言った。

「それは私だけじゃなくて、他の人もされたらとっても嫌なことよ。だから覚えておいて。人のものを食べたり使ったりするときは、必ずその人に許可をもらわないとだめよ」

フームの緑色の瞳が、力強くまっすぐにきらめいた。

「約束して。カービィ。今のこと」

「うん！わかった！約束する！」

カービィは誓いの約束を結んだ。

「うん、うん！えらいわ！カービィ！」

フームが嬉しそうに微笑んだと同時に、

「姉ちゃん！カービィー！」

「おい！フームー！カービィー！」

二人（いや、一人と一匹？）を呼ぶ声が聞こえた。

「あー ブーン トッコリー」

カービィはニコニコ笑いながら、ピョンピョンとはねた。

「おお？・・・なんだか今日はえらくご機嫌だなあ・・・」

不審そうな目つきで、トッコリと呼ばれた鳥は、カービィの頭の上をクルクルと回る。

しかしカービィは、トッコリが自分を不審そうな目で見ていることにもいっさい気にせず、飛び回るトッコリを見て楽しそうに笑っている。

「で？姉ちゃんとカービィは何してたの？」

「まあいろいろとー」

フームの答えにブンは「ふーん、変なの」と不思議そうに頭をかしげた。

「じゃあ今日もサッカーやろうぜ！他のみんなももうじきくるし！」

「げ！またサッカーかよ！」

「ええ？またあ？」

「なんだよ、姉ちゃんもトッコリも、ノリ悪いなあ」

「じゃあお前おいらくらい小さくなってみろよ！ボールにつぶされんだぞ！それも毎回！」

「だってサツカーって疲れるじゃない・・・それに前にカワサキの店の窓ガラス割って、さんざんなめにあつたじゃない・・・」

「でも最終的にアドレーヌの魔法で直したじゃん」

「それとこれは別だい！」

二人と一匹の言い争いの中、カービィは「あつ」と小さく言った。

「・・・どうした？」「・・・」

その言い争いはあっけなく終了を迎えた。

「ボール家においてきちゃった！とってくる！」

カービィは、急いで家に向かって走った。

「いつてらっしゃーい」

フームの間延びした声に手を振って、カービィは高原の丘の向こうに走り去っていった。

「・・・なんかカービィも大人になったよな」

「確かにお前よりはな」

「なんだってー！ー！？」

「もう！ブンもトツコリもやめなさい！」

トツコリにつかみかかったブンをフームは引きはがす。

「トツコリだって全然子供じゃないかー！」

「ふん！おいらをなめてもらっちゃ困るね！」

「そうね」

その時

「やつほーい みんな！」

「こんにちは、みなさん」

ベレー帽をかぶった髪の高い少女と、赤いリボンをつけた要請の女の子が現れた。

「おっすー！アドレーヌ！リボン！」

「お二人さん、悲しいお知らせだい。今日もサッカーだ……」

トツコリの嘆きに二人は「また!?」と叫んだ。

「いいじゃん！今のマイブームだぜ！サッカーは！」

「そのマーブームを他の奴に押し付けるのも、どうかと思っぜ……」

「あれ？力一君は？」

「どーいったんでしょか・・・」

アドレーヌとリボンがキョロキョロとあたりを見回す。

「ああ、カービィは今……」

続きを言おうとして、言えなかった。

なぜなら。

「おまたせえええええええええ！」

というカービィの巨大な声でかき消されたからだ。

「こらー！カービィ！近所迷惑でしょ！」

「そういうフームもうるせーぞ」

「トッコリは黙ってて！」

「よし！じゃあやろうぜ！」

「またガラス割らないでねー……描くの面倒だから」

「行きましょう！カービィさん！」

「うん！」

ポーン！と広大な大地に白黒のボールが飛び上がる。

それを追いかける子供たち。

楽しそうに、無邪気に。

笑って笑って、はしゃいで、はしゃいで、ふざけてふざけて。

嫌な気持ちを投げ出すように。

走って走って。

大切な時間。

そう、忘れてしまっくらいに平和で大切なこと。

第2章 白色の夢（前書き）

ツンデレマルクかわいいよツンマル（＾o＾）
設定は銀河に願いをの後ってことで許してください・・・（汗）

第2章 白色の夢

あれ？ここはどこ？

ここは君の夢だよ。ただちょっといつもと違うけどね。

違うって？……ていうかボク……夢の中にいるの？

そうだよ。君は今眠っていて、夢を見ているんだ。

そうなんだ。ボク、夢の中でこれは夢ってわかったの初めて。

そういうことを覚醒夢っていうよね。

？そうなの……この夢は真っ白だね。一面の真っ白。

君の夢なもの。

ボクの色？夢には色があるの？

うん。夢は心の内側の鏡なもの。

鏡……。

そう。鏡。

ねえ。

なに？

君は誰？さつきから声しか聞こえないんだけど……。

ふふふ……じゃあ、今君が一番会いたい人を呼んで。

一番会いたい人……？

さあ、誰？

マルク。マルクに会いたい。

どうして？

わからない。でも、ボクはマルクに会いたい。

どうして？君が本当に会いたいのは、メタナイト卿やデデ大王、

グリルやドロシア、フームやブンヤトツコリ、アドレーヌやリボン

や他の人かもしれないよ？

ううん。ボクその人たちならいつでも会えるもの。

マルクとは会えないの？

……。

わかった。マルクだね。

．．．．。

．．．．。

．．．．。

．．．．。

．．．．。

．．．なんて顔してるのサ。カービィ。

マル．．．ク。

ひさしぶりなのサ。銀河での戦い以来サ。

やっと．．．会えた。

！．．．．なんでお前が泣くのサ。

よかった．．．生きてたんだね．．．。

ぼくがそう簡単に死ぬと思ったのか？まあ死にかけたけど。

．．．あの時、意地でもポップスターに連れてくれば良かった。

ポップスター．．．か。

ここは夢・・・じゃあマルクも今眠ってるの？

まあね。ぼくの魔力は戦いでほとんど失われてしまったから、眠っていないとね。

そっか・・・。

この夢は・・・誰かの魔法で構築されてるのサ。

え・・・。

よっぽどお前に伝えたいことがあるんだね。

誰が・・・？

・・・ぼくのフルパワーの時の魔力よりも強い・・・こりやただものじゃないのサ。

魔力ってことは・・・魔法使い？

そうでもないのサ。魔法使いじゃなくなつて魔力を持っているのは

腐るほどいるのサ。

そうなんだ・・・。

ホントお馬鹿さんだねえ。あーあ、どうしてぼくはこいつなにかに 負けたんだろ。

・・・。

まあ、時間がないから、ぼくが伝えるべきことを伝えるのサ。

伝えるべきこと？

この術者はお前に伝えることがあるみたいなのサ。で、ぼくがその

伝言を伝えるべきもの。

だから誰かを呼び出したんだ。

そういうことサ。じゃあ伝える。「もうすぐこのププランドは今　まで史上最大の危機に陥る。その危機からププランドを守ってほ　しい」以上。

最大の危機！？

はー・・・ぼくの事件は最大の危機ではなかったのか！。

マルク！どういうこと？

知らないのサ。ぼくが伝えられることは全部伝えたのサ。

危機がくるならなんかあるじゃん！

なんか？

ほら！この危機を止める方法・・・とか・・・。

だからあれだけだって・・・。

そんな・・・。

・・・・・・・・。。

でも・・・最大の危機ってなんだろう・・・。

・・・・・・・・。。

マルク？

・・・いや、ぼくの行動は失敗だったのになって・・・。

・・・・・・・・。。

！だから・・・なんでお前が泣くのサ・・・。

ごめんね・・・・・・・・。ごめんねマルク・・・。

はあ？

君のこと・・・助けられなかった・・・。

それは・・・！お・・・お前には関係ないのサ！

・・・・・・・・。。

だっ・・・！ぼ・・・ぼくは・・・自分のした行動は間違っ
たっ　て思ってるのサ・・・！

え・・・？

だからっ！ぼくは自分のした行動が間違ってたて思ってるのサ！

・・・・・・・・。。

いちいち泣くのはやめるのサ！ぼくは別にもうお前のこと恨んでも ないし憎んでもない！

・・・・・・・・。。

もう！お前のそういうお人よしのところ大嫌いなサ！

・・・・・・・・よかった。

？なんなのサ・・・・・・・・

ボク、ずっと怖かった・・・・。マルクに恨まれてるんじゃないかと思ってる・・・・。

・・・・！

よかった。よかった・・・・。

うつうつれし泣きもやめろー！気持ち悪いのサ！とにかく！伝える べきことは伝えたのサ！さ・・・・さいなら！

待って！

なんなのサー！しつこい！なんなのサそのしつこさは！

大好きだよ……！マルク……！

……！

マルク！ポップスターにいつでも来てね！ボク……待ってるから！

……。。。

マルクはボクの大切な友達だよ！ずっとずっと！

……友達……か……。。

うん！

お前の強さは……そこか……。

？

そうだったのか……サ。

あ！言い忘れた！ポップスターにこれなかったらボク迎えに行くから！

……。。。

行くからね！

……お……。。。

へ？

お前のそういうところは・・・嫌いじゃない・・・のサ。

エヘヘ ありがとう。

・・・じゃあ大好きっていうくらいなんだから、一線を超えない程 度の愛の言葉でも考えていてほしいのサ！

一線？

お前の知らないことだよ！バーカ！

そうなのー？

そうサ！

エヘヘー

ホント気持ち悪いな・・・お前は。

カービー。

消える前に一言。

死ぬなよ。

お前はぼくが殺すんだからな。

あともう一言。

「
」には気をつけるのサ。

なに？

なに？

マルク？

聞こえない。

聞こえないよ……。

「
って……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782y/>

星のカービィ 運命の車輪

2011年11月29日16時46分発行